

(12) 学齢期の自閉症スペクトラム障害児における言語障害の特徴

～K-ABC を用いた分析からの検討～

川崎医療福祉大学大学院感覚矯正学専攻修士課程 ○中田 薫

川崎医療福祉大学感覚矯正学科 小坂 美鶴

【要 旨】

〔目的〕 ASD 児は語彙獲得の遅れや歪みがあるといわれている。また認知能力の偏りや K-ABC の先行研究において「なぞなぞ」の低下が報告されている。本研究では K-ABC を用いて学齢児における ASD 児の認知能力と言語障害の関係性を検討し、「なぞなぞ」の低下要因とその関連する要因および誤りの質的分析も加え考察する。

〔方法〕 対象は6歳8ヵ月～12歳8ヵ月で言語性 IQ または動作性 IQ が70以上の ASD 児14名とした。手続きは、総合尺度間の比較、習得度尺度の比較、「なぞなぞ」の低下要因に関する認知処理過程尺度および田研式言語発達診断検査（以下田研式）と PVT-R を用いてそれぞれの検査結果を比較した。また「なぞなぞ」の質的分析も実施した。

〔結果〕 総合尺度、習得度尺度において一貫した傾向は認められなかった。「なぞなぞ」で1SD 以上の低下を示した症例は「ことばの読み」が良好であり、

認知処理過程尺度では、語彙、working memory、統合と推理の問題が認められ、「なぞなぞ」が1SD 以上高い症例においても統合と推理に問題がみられた。語彙に関する検査では、PVT-R に比べ田研式の成績低下を示す症例が5 / 6例、両検査ともに低下したのが5例であった。「なぞなぞ」の質的分析では、造語や迂遠な表現、「わからない」という反応がない症例が認められた。また、問題文に含まれることばをそのまま用いた解答、関連語や無関連語への誤りが認められた。

〔考察〕 ASD 児における「なぞなぞ」の低下要因として語彙、working memory、統合と推理といった3要因が考えられ、さらに階層構造があることが推測された。また、本研究では語彙全体の遅れと語彙理解に比べ語彙産出の成績が低下が考えられた。学齢期になると論理的思考や抽象的な概念理解が発達するが語彙学習の歪みと遅れは残存することが示された。